

2021/9/19

(オマケの英語教室 Then for what?) 書庫版



「いい加減だ」「文法的にいかがなものか」「少し無責任ではないか」というご意見が後を絶たないのですが反論する積りは全くありません。本シリーズは実際に現場で起きている事を書いた書物です。現場では文法的に正しくない事やいい加減な事が頻繁に起こっております。それを現場に居合わせない方々にとってもある程度普遍的で分かり易い様にアレンジして書いている書物です。

「正しい英語」の書物かと言われれば「No」でその基準からすれば失格でしょう。

では何の書物であればそうはならないのかと云えば、

「最終目的を正しい英語ではなく円滑なコミュニケーションに置いている」

とすれば少しは意味があるのかなと思っております。

冒頭で「反論はしない」と申し上げましたが、そういう意味では最後の「無責任」だけは当たっていない気がします。

もし今後もお読み戴けるのであれば本書は

「初めて外国語に接した現場の苦労物語」

少し箔を付けて云えば「解体新書」を著すに当たってオランダ語と格闘した杉田玄白の伝を借りて

「蘭学事始」風「満足な辞書など元々無く考えるしかなかった頃を模した英語教室」

とでも申しましょうか。

話がそれてしまいました。

基。

ところで我が国の子供達は鼻から「正しい英語」だけを「教わり」ます。

一方外国のろくすっぽ学校にも行けない様な子供達は正しいか正しくないかは二の次にして「通じる英語」を「獲得」していきます。

そして此処が一番違うのですが

「それを試す場」が我が国では「教室」外国の子供達は「生活」の中という違いです。

もう一つ付け加えるとすれば

我が国では「その場限りの一回だけ」なのに対して外国の子供達は「試行錯誤しながら通じる迄何回でも」という差です。

そう考えると「初めから正解だけ教わる」というのは

「最も頭を使わない」「経験も積み上がらない」一番損なやり方の様な気がします。

現場では

「正しい英語を喋れないお前達が悪い。正しい英語を覚えてこい」

では話が終わってしまいます。

「俺達は英語を習いに来たんじゃない。カレーを作りに来たんだ」

勿論口には出しませんが腹の中でそう思われるだけで私共のカリーレストランは空中分解してしまうだけなのです。

お客様にもいいサービスを提供できなくなるだけなのです。

英語というのは「目的ではなく手段、道具」です。

ましてや「正しい英語」というのはその中のほんの一基準でしか在りません。

「正しい」のが有効なのは「それが一番通じる」という前提が在っての話です。

そうでなければ「正しい」は有効ではなくなります。

まずそこから考える必要があります。・

では英語や語学のそもそもの目的は何だったのか？

それは、

「円滑なコミュニケーション」

この目的と手段のはき違えがあってはならないと思います。

Language is merely one of tools.

Then for what?

For good communication.

That`s all

追記)

そうなれば英語は暗記学科ではなく試行錯誤学科になるでしょう。